

博士課程教育リーディングプログラムフォローアップ報告書(平成24年度)

博士課程教育リーディングプログラム委員会

プログラム名称	フotonサイエンス・リーディング大学院	申請大学名	東京大学
申請大学長名	濱田 純一		
プログラム責任者	相原 博昭		
<p>1. 進捗状況概要</p> <ul style="list-style-type: none"> 既存の教育・研究資源と活動成果を十分に活用し、堅調なフィロソフィーに立脚して構築されたプログラムが着実に実行に移されている。国際連携や産学連携についても、工夫を凝らした周到なシステムが準備されている。学生もこのプログラムに積極的に参加しており、教員との間に良好な信頼関係が醸成されつつある。 フotonサイエンスという分野において、確固たる専門力を基礎として、領域を超える広い視野と発想力、リーダーシップと実行力を醸成するという理念は、着実に実行されているようである。学生が、多様な尺度に基づいて、社会におけるキャリアパスを自分たち自身で開拓し、広げる実践力を身に着けた人材として育つよう、今後更なる努力が期待される。 「2. 意見」の項目に述べるような細かい改善希望点はあるものの、プログラム全体としては、今後の教育改革のモデルケースとして成功に向っていると判断される。わが国の構造改革に資する、高い理想と強い意志を持った人材の育成に期待したい。 <p>2. 意見（改善を要する点、実施した助言等）</p> <p>本プログラムの趣旨は、国際社会で存在感を放つ多様な人材を育成することにある。そのために、以下の点を検討・改善されたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> 外国人教員と女性教員を増やすための工夫が不十分である。様々な課題はあると思うが、努力目標を立てて改善することが望まれる。 派遣プログラムは海外、国内企業、国内大学のうちから選択して1件とされているが、学生の見識を広げる意味でも、自身のキャリアパスとは異なる基礎力を養う上でも、複数選択の可能性を検討されたい。予算上の課題はあろうが、是非工夫して頂きたい。 参加学生が自らのアイデンティティを持ち、切磋琢磨して成長するため、参加学生同士の情報交換の場などを作ることが必要である。 組織目標に対して、参加者である学生の意識が追いついていない点も見受けられる。今後更に、教員側と参加学生のより密度の高い対話が望まれる。 本プログラム修了後のキャリアパスとして、産業界へのルートイメージは産学連携や産業界の人材を講師とした講義などである程度把握できるが、政・官界へのルートイメージを把握する機会が少ない。政・官界からも人を招いて話を聴く機会を設けるなど、ルートイメージが持てるような工夫が望まれる。 イノベーション創出に向けて、自ら事を起こすというマインドを育成するために、東京大学エッジキャピタル等のファンド活用の教育視点も検討の価値があるのではないか。 わが国がグローバル化対応を進めるに当たって、海外で自国の置かれた状況や将来について明確な意見を語る事が出来るよう、日本の文化や政治・経済等についての教養を高めることも、きわめて重要である。 派遣プログラムにおける国内企業研修先について、様々な企業の協力を得つつ学生に対し明示する必要がある。 過去に国内で導入された修士・博士一貫コースの事例においては、定員充足が達成できないこと、明確なインセンティブが見えないこと、途中でのコース離脱者への配慮が不十分という問題点があった。本プログラムが成功するために、これらの事例で明らかになった課題を踏まえた、十分な配慮と対策を期待する。 			